

# 法然教学における三心について

白 井 元 成

## 一

元祖法然上人は『選択集』の巻頭に「南無阿弥陀仏往生之業  
念仏為本」  
と標挙し、巻末には、

今はからざるに仰せを蒙れり、辞謝するにところなし。

仍て、今なまじいに念仏の要文を集め、あまつさえ念仏  
の要義を述せり。<sup>①</sup>

といわれていることよって知られる如く、『選択集』は  
九条兼実の要請に応じて選集せられたものであって、念仏  
の要文を集め、それを導きとして念仏の要義を述べたもの  
にすぎないと自ら謙遜していられる。然るに、『選択集』  
一部を通じてわれわれが最も端的にうけとるものは、いう  
までもなく実践的な念仏である。即ち、善導の『観経疏』

を「西方の指南、行者の目足」にして「弥陀の直説」であ  
るとして尊重、又彼を「弥陀の応化身」であり、「専修念  
仏の導師」であると讃えるが如き、全く「偏依善導一師」  
という精神に立脚して、当時民間に行われた浄土信仰に鋭  
い批判と淘汰を加え、選択本願の念仏を開顕せられたとこ  
ろにその特色を見出すのである。<sup>②</sup> 従って念仏についてはま  
ことに精緻な論述がなされているが、信心については念仏  
論ほどに詳細な論述がなされていないかの如き印象を与え  
る。それは第八三心章に展開する私積が他に比較して短い  
ということにも起因しようが、『一枚起請文』に、

但三心・四修なむど申す事の候は、皆決定して南無阿  
弥陀仏にて往生するぞとおもふ内にこもりて候なり。<sup>③</sup>

といわれたのをはじめとして、

称名の外には三心なし<sup>⑧</sup>

とか、更には

衆生称念必得往生としりぬれば、自然に三心を具足する<sup>⑨</sup>。

等とあるところから、所謂行中撰信して信心の沙汰を詳細にされぬ場合が多いとみられるのであって、

人目をかざらずして、往生の業を相続すれば、自然に三心は具足するなり<sup>⑩</sup>

といわれる如く、念仏往生を誓う選択本願に順じて称名しているのであれば、称名する態が本願を信じていることになるからであるとみられたのであろう。

然るに三心章に展開する信心論は、引文段にあっては善導の『散善義』並びに『往生礼讃』三心積の文を長々と引用しながら、その私釈段は極めて短いものである。然し、短いということが直ちに内的な信を軽視せられたということにはならないのであって、元祖は先ず、

念仏の行者必ず三心を具足すべきの文<sup>⑪</sup>

と標題し、私釈にあっては

引く所の三心は行者の至要なり<sup>⑫</sup>

とし、

茲れに因って極楽に生ぜんと欲わんの人は全く三心を具足すべし<sup>⑬</sup>

といい、更に深心を積するに

当に知るべし。生死之家には疑を以て所止となし、涅槃の城には信を以て能入となす<sup>⑭</sup>

など、短い中にも端的に信の重要性が鋭くも語られているといえよう。

蓋し、仏教にあって、信は「帰依三宝」や『智度論』第一に、

仏法の大海には信を以て能入となす<sup>⑮</sup>

とある文などによって知る如く、従来仏道入門の基礎的條件として取扱われ、また仏道実践の要諦として扱われてきたものであって、従ってそれはまた、大乘菩薩の具心の心としての菩提心をおこす前提となるものと考えられていたのである。従って『無量寿経』をはじめとして、中国・日本の浄土教家はすべて菩提心の必要性を説き、その上に諸種の行業を修すべきことをすすめている。然るに元祖にあっては、第三本願章において、

彼の諸仏土の中に於て、或は布施を以て往生の行とするの土あり。……或は菩提心を以て往生の行とするの

土あり。……即ち今、前の布施持戒乃至孝養父母等の

諸行を選び捨てて、専称仏号を選び取る<sup>14</sup>

と、専称仏号による浄土往生を明らかにし、更に第四三輩章においては、『無量寿経』巻下に説かれている菩提心等の行業について、

上輩の文の中に菩提心等の余行を説くと雖ども、上の本願の意に望むるに、唯衆生をして、専ら弥陀名を称するに在り。本願の中には更に余行なし<sup>15</sup>。

と、阿弥陀仏の本願には余行往生の考えはないといい切つていられる。

かくの如く、法然上人は菩提心を雑行に撰して浄土往生には不要なものとするばかりでなく、却って、従来仏教入門の初心とせられ来った信を、念仏と同様必須条件とし、浄土願生者必具の心とせられたことは、仏教における一大革新であつて、日本浄土教思想展開の上においてまことに特筆大書すべきことであるといわねばならない。しかも、三心相互の関係について未だ詳細な説明をみることのできない、定散通撰の三心を明かす善導釈を引用しながらも、善導の意図を鋭くも見破り、更にそれを一步すすめて、その本意を明確に把握せられたものといふことができよう。

更には、宗祖が三心の真仮と三心即一論によつて、信は自心の建立ではなく他力であることを明らかにして、念仏往生

即信心往生なる旨を開顕せられた信思想展開への方向が明らかに窺知せられるのである。本論においては三心章の私積を中心にして、いささかその考察を試みることにしよう。

註

- ① 『選択集』末 二八丁右
- ② 『教行信証』後序(『御自釈』 五八丁左) 参照
- ③ 『選択集』末 二七丁左
- ④ 拙論「選択集の中心問題」(『真宗研究』第十二輯)参照
- ⑤ 『聖全』巻四一四四頁
- ⑥ 『黒谷上人御法語』(『聖全』巻四一四五頁)
- ⑦ 『諸人伝説の詞』(『聖全』巻四一六七頁)
- ⑧ 同 右(『聖全』巻四一六七三頁)
- ⑨ 『選択集』本 三丁左
- ⑩ 同 右 本 四丁右
- ⑪ 同 右 本 四一丁左
- ⑫ 同 右 本 四二丁右
- ⑬ 『大正蔵』巻二五―六三頁
- ⑭ 『選択集』本 一五丁左―一六丁左
- ⑮ 同 右 本 二二丁左

二

凡そ三心章において、まず留意せしめられることは、念仏の行者必ず三心を具足すべきの文<sup>16</sup>。

と標題し、そこに「念仏行者」の四字がおかれていることである。『選択集』全十六章の標題にあって、この四字が置かれてあるのは、第七・第八・第九・第十五の四章のみである。およそこの四章以外の十二章は、念仏と諸行についてその行体の勝劣を明かすものであるが、これらの四章は共に安心を明かすものとみられるのである。そのうち、第七撰取章は念仏を以て本願とせられるが故に、弥陀の光明は余行の者を照らさず、独り念仏の行者のみ照護撰取せられることを、『観経』真身觀の文と善導の疏文を依拠として明かすものである。更に第十五護念章では大方恒沙の諸仏が念仏の行者を照護せられる旨を善導の疏文を以て明かさんとするものである。かくの如き撰取不捨乃至は護念の利益を顕わすためには、その利益を受ける機(人)を挙げなければ説くことはできないのであって、ここに所彼の機を「念仏行者」と挙げられたのであろう。

然るに、第八三心章は正しく上來明らかにされ来たつて撰取本願の念仏を信知する、即ちいわゆる機受の安心を明かすものであって、ここに「念仏行者」といって、念仏有縁の所彼の機を標示、念仏往生の本願を信ずべしと示されるものであるとみななければならない。しかも『選択集』の各章にあっては、大・觀・小の三經の引文次第を恒に遵守

し、文に随って積を施しているにもかかわらず、次の第九四修章にあっては、經文を引かず、ただ善導の『禮讚』と慈恩の『西方要決』の積文にのみ依って展開せしめられている。恐らくそれは、信具の行、即ち五念門報恩の修相を明かすもので、業事成弁は信心為本であることを示すものであろう。かくて標題を、引用の經文に照合するとき、「念仏行者」とあるのは「若有衆生願生彼國者」であり、「必可具足三心」とは「具三心者必生彼國」なる經説であるといわねばならない。

凡そ、法然上人が三心を解釈せられる場合、三心章をはじめとして、その多くは『観経』の三心を用いていること周知の通りである。思うに、本願念仏の心相を積するのには、むしろ直接『大經』に説く本願の三心をもってすべきが自然であるのに、『観経』の三心を用いられることはいささか不自然だという批難をまぬがれ得ないであらう。恐らくは善導にその軌範となすべき疏積を求め得なかつたことにもよるのであろう。然し、法然上人が善導の至誠心積を料簡して、

しかるを人つねに、この至誠心を熾盛心と心えて、勇猛強盛の心をおこすを至誠心と申すは、此積にたがふ也。文字もかはり、心もかはりたるものを。さればとて

その猛利の心はすべて至誠心をそむくと申すにはあらず、それは至誠心のうゑの熾盛心にてこそあれ、真実の至誠心を地にして、熾盛なるはすぐれ、熾盛ならぬはおとるにてある也<sup>⑧</sup>。

と、善導の意を誤解してはならないと、当時俗化し墮落の極に達し、ただ名利を求めて外相のみを飾ろうとする一般淨土教をも含めて、懇切なる注意がなされていることに留意しなければならぬ。

しかも、善導が『散善義』等で『観経』の三心を積ずる場合には、つねにその源底に『大経』の本願を基準にするという方規がとられており、従って、『観経』の三心を積ずることは、そのまま本願の三心を積することになると考えられたのであって、ここに『観経』の三心を以て本願念仏の心相を明確にせんとせられたのであろうか。そのことは『観経』に

今此の経の三心は、本願の三心を(に)開く(同じ)。

爾る故は、(謂く)至心とは(即ち)至誠心也、信樂とは(即ち)深心なり。欲生我国とは(即ち)廻向発願心なり<sup>⑨</sup>。

とあり、更に『西方指南抄』巻中本にも、

『観経』の三心、『小経』の一心不乱、『大経』の願

成就の文の信心歡喜と、同じき流通の歡喜踊躍と、みなこれ至心信樂之心也といへり。これらの心をもて、念仏の三心を積したまへる也<sup>⑩</sup>。

等といわれたことよってよくその間の消息が窺知できるのであろう。

然しながら、本願の三信は「乃至十念」の念仏とのみくみあって往因として、「若不生者」の往果に相對している。それに対し定散二善を開説する『観経』に説く三心は、必ずしも本願念仏のみの心ではないといえよう。そのことは既に善導が『散善義』三心積の結文に、

又此の三心亦通じて定善之義を撰す。応に知るべし<sup>⑪</sup>。

と指示し、定散二善に通じ、十六観門を一貫する往生者の必具の条件とみているのである。従って、善導の三心積にあって、定散二善に通ずる三心が積せられてくるのは自然ななりゆきであり、それ故に善導は深心積に於いて、正雑・助正の名目をもって往生行を簡らび、『観経』の真実義からいえば、深心所修の行は順彼仏願故の正定業としての念仏であることを明らかにしなければならなかったのである。されば法然上人もよくそのことに着眼し、私積の結文には、

此の三心は總じて而もこれを云へば、諸行の法に通

じ、別して而もこれを云へば、往生の行にあり、今通を挙げて別に撰す。意即ち周し<sup>⑥</sup>。

と、善導の配慮を明らかにしている。

かくてこの三心相互の關係は、善導積にあっては何等その詳細な説明をみないため、その内容について知ることができないが、おそらく三心各別のものとするが如くである。然るに、法然上人は『西方指南抄』卷中本に、

又云く、導和尚深心を積せむがために、余の二心を積したまふ也。經の文の三心をみるに一切行なし、深心の積にいたりて、はじめて念仏の行をあかす所也<sup>⑦</sup>。

とあり、また『三經積』にあっては、

三心はまぢまぢにわかれたりといへども、要をとり證をえらんでこれをいえば、深心におさめたり<sup>⑧</sup>。

等といい、更にまた宗祖親鸞聖人も『浄土文類聚鈔』に法然の意図を明示して、

明かに知んぬ。一心は是れ信心なり、専念は即ち正業なり。一心の中に至誠・廻向の二心を撰在す<sup>⑨</sup>。

と稟承していられる。かくて、三心は念仏往生を信ずる深心に撰帰せられるべきものと考えられたのである。定散二善に通撰する『觀經』の三心の中から、深心積下に示された順彼仏願故の正定業としての本願念仏とのみ組み合い、

従つて、本願の三心と同致する辺のみをとつて、念仏行者は三心を必具すべきことを明らかにしようと思はれるものが三心章であるとみられる。かかる点に留意するとき、上品に説かれる三心を十六觀經一部の要腑として解釈している善導の三心積を引用しながらも、その意図を明確に把握し、更に一步進めて、その真意開顯に努めたものといふことができるであらう。

## 註

- ① 『選択集』本 三丁左
- ② 『往生大要抄』(『聖全』卷四一五七一頁)
- ③ 『聖全』卷四一三五二頁
- ④ 同 右 卷四一三三二頁
- ⑤ 同 右 卷一五四一頁
- ⑥ 『選択集』本 四二丁右(四二丁左)
- ⑦ 『聖全』卷四一三三二頁
- ⑧ 同 右 卷四一五五四頁
- ⑨ 『浄土文類聚鈔』一六丁右(三書合本)

## 三

先にふれた如く、元祖は三心章の結文に善導の三心積の真意を鋭くも徹視して、

此の三心は総じて而もこれを言へば、諸行の法に通

じ、別して而もこれを言へば、往生の行に在り。今通を挙げて別に撰す。意即ち周し<sup>①</sup>。

と、『観経』の三心が念仏と諸行とに通ずるものとみてい  
る。かように念仏と諸行とに通ずる三心であるとするなら  
ば、それは更に細密に分別せられなければならない。

然るに、正嘉二年書写の奥書を有する『三部経大意』の  
至誠心積には『和語灯録』に輯録せられている『三部経  
積』には見られない、次の如き文を見出すのである。即  
ち、至誠心を積し終つて、

ただしこの至誠心はひろく定善・散善・弘願の三門に  
わたり積せり。これにつきて総別の義あるべし。総とい  
ふは自力をもて定散等を修して往生をねがふ至誠心な  
り、別といふは他力に乗じて往生をねがふ至誠心なり<sup>②</sup>。

といて、至誠心積に自力・他力の二つの場合を見ようと  
していられる。もっとも、『三部経大意』のこの部分が後  
に付加せられたものであるとすれば、書誌学的にはなお検  
討されねばならぬ必要があるのかもしれない。けれども、  
この文に接するときわれわれは三心に真仮をみられる宗祖  
の三心理解を想起せしめずにはおれないのであって、しか  
も、既に三心章の私積そのものの上にそうした意趣のある  
ことを明らかに看取することができるのである。

即ち、元祖はまず至誠心を積して、

至誠心とは是れ真実心なり。その相彼の文の如し<sup>③</sup>。

と、善導の積に従つて至誠心を真実心と規定し、且つ善導  
疏に一任しながらも、続いて、

但し、外に賢善精進の相を現じ内に虚仮を懐くとは<sup>④</sup>

といて、善導の「外現賢善精進之相、内懐虚仮」の文を  
摘出して、内外相翻をもつてこれを積し、内外共に真実で  
あるならば出要に足ると、三業の不調を簡び、三業相応す  
べきことを示していられる如くである。即ちその意をいえ  
ば、外相の賢善精進を翻えして内に蓄え、内の虚仮を翻え  
して外に播し、外相はよしんば愚悪懈怠虚仮であっても、  
内心が賢善精進真実であるならば、亦約まるところ内外真  
実となつて共に出要に足ると示している。

然らば、元祖の善導至誠心積に対する領解は、かかる内  
外真実なる至誠心を行行者必具の心として念仏行者に要求せ  
られたものであるうか。若し内外相翻が念仏行者に要  
請せられるものとするならば、善導が次の深心積に、生死  
罪濁、曠劫来流転にして、無有出離之縁の機が往生すると  
信ずる機の深信と直ちに矛盾懂着し、更には貪瞋二河の煩  
悩を具しながら救われると開顕せられる二河譬とも矛盾し  
相入れないことになる。更にいえば、内なる煩惱悪性を侵

めることの出来る聖者でなければ発すことのできない至誠心となつて、凡夫入報という仏意を開顕せんとせられる善導の立場は根底からくずれ去ることになるといわねばならない。かくて、ここに内外不調の不真実を厳しく誠しめ、内外真実の至誠心が示されるのは、先にみた三心章私積の結文、更にはここに「不得」の二字が省略されていることによつて窺知せられる如く、それは念仏行者の安心としての至誠心を示すものではなく、暫らく諸行に通ずる総としての自力の至誠心を示したものとみられるのであつて、決して凡夫入報の仏意を開顕せんとする善導の志願を閉塞せしめるものではない。そのことは本願章に照応するとき、より明らかに知ることが出来るであらう。

凡そ、本願章叙述の中心課題は、標題に明らかな如く、阿弥陀仏の本願は何故に余行を廃して、ただ念仏の一行のみを往生の正業として選択せられたのであるかという決定の根拠を明らかにするものである。かくて選択本願の念仏が何故によく正定の業たりうるのであるかという核心的な問題については、

答て曰く。聖意測り難し、輒すく解するに能はず。然りと雖ども、今試みに二義を以てこれを解せん。一には勝劣の義、二には難易の義なり。⑤

と、勝劣・難易の二試解をもつて仏意を恐慮仰推し、本質的には聖業にしてその特秀性の故に、実践的には普遍妥当性の故にとつて二つの理由をもつて、念仏一行を選択せられた大悲の願意を明確にせられている。然るに、難易の義を示すのに、善導の『往生礼讃』並びに、源信の『往生要集』を引き、更には法照禪師の『五会法事讃』の文を引用してこれを助成していられる。即ち、

衆生障重にして境細心麤、譏讒神飛にして観成就し難きなり。⑥

とか、

今念仏を勧むることは……ただこれ、男女貴賤、行住座臥を簡ばず、時処諸縁を論ぜず、これを修するに難からず。⑦

等と示し、更には四雙八重を以て諸行を選択せられた理由が明らかにせられている。かくて、永遠に救いなき、自己の動転懊悩の上に、即ち、愚鈍下智、破戒無戒等という現実存の人間本性への深い主体的な自覚の上によく願心が感得せられ、末法の時機に相應する念仏往生の道が力強く顕揚されたのである。選択本願の念仏が「愚痴の法念房」、「十悪の法然房」と、実体験を通した主体的自覚の上に見出されたとするならば、今ここに展開する内外真実を勧め

る至誠心とは、三学の修道に洩れた無智の身、即ち、念仏行者の心(信)を語るものではなく、諸行に通ずる自力の心(信)を示されたものであることは自ずから知られるであろう。従って、若し善導積の如くに、削除せられた「不得」の二字をこれに加え復元するならば、宗祖が『唯信鈔文意』に

不得外現賢善精進之相といふは、浄土をねがふひとは、あらはにかしこきすがた、善人のかたちをふるまはざれ、精進なるすがたを示すことなかれとなり。そのゆへは内懷虚仮なればなり。<sup>⑧</sup>

と示される如く、更には六要鈔主が、

不得等とは誠門の積なり。此の句の文点、現より得に還る。当流の学者定んで存知せるか。今この積の意、雑行を誠しむるなり。然る所以は、凡夫の心更に賢善精進の義なし、ただこれ愚悪懈怠の機なり。而るに人自心の愚悪を顧みず、随縁起行す。必ずこれ虚仮雜毒を免れざれ。内懷虚仮これその義なり。然れば賢善等の相を現せず、自心三毒の悪性を識知して、自力の行を捨て他力の行に帰して真実清浄の業をうべきなり。この心を勉むるを以て今積の要となす。<sup>⑨</sup>

と、善導の文に対する宗祖の訓読の正しさを指摘せられ、

以て内外相應の自力の真実心をして、他力の清浄の業を須いることを明かすものとみられるのは決して無理な理解ではなく、必然にして極めて自然なる領解であるといわねばならない。かくて「不得」の二字を加えず、「但し」といって展開せしめられる内外相翻の三心章私積の文によって、通諸行としての自力の安心を示さんとせられたものとみなければならぬ。

## 註

- ① 『選択集』本 四二丁右〱四二丁左
- ② 『聖全』卷四一七八七頁
- ③ 『選択集』本 四二丁左
- ④ 同 右 本 四一丁左
- ⑤ 同 右 本 一六丁左
- ⑥ 同 右 本 一七丁左
- ⑦ 同 右 本 一七丁左
- ⑧ 『唯信鈔文意』(『聖全』卷二一六三五頁)
- ⑨ 『六要会本』卷四 一三丁左

## 四

然るに元祖は次の深心を積して、

次に深心とは謂ゆる深信の心なり。当に知るべし、生死の家には疑を以て所止とし、涅槃の城には信を以て能

入となす。故に今二種の信心を建立して九品の往生を決定するなり。<sup>⑧</sup>

といつて、先に考察した如く、三心の帰一するところとみられる深心積に対する領解を端的に明示していられる。即ち「今通を挙げて別に撰す」といわれる念仏行者の正しき信は、善導によって鮮明にせられた独創的表現としての二種深信にほかならないことを示すものであつて、従つて、「故に今二種の信心を建立して九品の往生を決定するなり」と讃嘆せられるのである。かくて、そこに自力・他力の言は直接にみられないけれども、先の内外真実の至誠心積をもつて総としての通諸行の自力の三心に代表せしめ、更に今深心積において、別としての念仏行者の三心は如来利他、他力の信であることを指教せられたものとみることができよう。

およそ善導の明らかにする二種深信とは、

一には決定して、自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫より已来、常に没し常に流転して、出離の縁あることなしと深信す。二には決定して、彼の阿弥陀仏の四十八願を以て、衆生を摂受したまふこと、疑ひなく慮りなく、彼の願力に乗じて定んで往生をうと深信す。<sup>⑨</sup>と釈示せられるものである。元祖はこの文について『往生

大要抄』には、

二の信心といふは、はじめにわが身は煩惱罪悪の凡夫也、火宅をいでず、出離の縁なしと信ぜよといひ、つぎには決定往生すべき身なりと信じて一念もうたがふべからず、人にもいひさままたげらるべからずなんといへる、前後のことば相違して、心えがたきになれども、心をとどめてこれを案ずるに、はじめにはわが身のほどを信じ、のちにはほとけの願を信ずる也。ただしのちの信心を決定せしめんがために、はじめの信心をばあぐる也。<sup>⑩</sup>

と私に解し、更に、その建立せられた正意をたずねて、これは善導が未来の衆生の疑いを霧散せしめんが為に、煩惱を断ずることなく、たとえ造悪の凡夫であつても、深く弥陀の本願を信じ念仏すれば、十声・一声にいたるまで決定往生する旨を釈示せられたものであると述べ、

この積の、ことに心にそめておほへはんべる也<sup>⑪</sup>

といつていられる。浄土教、就中、念仏往生義において深心(信)が如何に重要なものであるか、また元祖が自ら信を如何に重要視せられていたかはこれによって如実に知ることが出来る。かくして、機の深信とは現実の人間が具有する本質的な人間悪の原因を永劫の過去世にわたる生死流

転に求めた深い懺悔の念であつて、従つて、曠劫流転という永い生死の過去を背負つた、未来際かけて到底出離之縁なしと暗黒の人間像を画くことによつて、自己が凡夫であることを信知せしめられ、もつて自力無効なることを知らしめられるのである。これに対し法の深信には、無有出離之縁の自己にかけられた本願の大悲に必ず救済せられると信知し、本願の名号に無疑無慮に乗托するという希望に満ちた人間像が示されている。換言すれば、機の深信は未だ救済の縁なき現存在の信知であり、法の深信とは本願力に乗托することにより、必ず救済されると確信した現存在の信知である。かくて「無有出離之縁」の凡夫の自力心を捨てて「乗彼願力定得往生」と本願他力に帰すべしと、二種深信に終歸せしめられているのであることを知るのであつて、元祖はそうした善導の指教を的確に把握して、

生死の家には疑を以て所止とし、涅槃の域には信を以て能入となす。<sup>⑧</sup>

と、端的な言葉によつて善導の深信積を領解し、信の重要性を強調せられているのである。従つて、

又この中に一切の別解別行異学異見等と言ふは、是れ聖道門解行学見を指すなり。その余は即ち是れ浄土門の意なり。<sup>⑨</sup>

と善導の文を釈し、

明かに知んぬ。善導の意、亦この二門を出でず。<sup>⑩</sup>

と教示せられるのも、時機不相応の自力聖道門を捨て、時機相應の他力浄土門に帰入せしめんとする、即ち、聖道諸行の前には無有出離之縁の機がよく定得往生できるのは、ひとえに浄土門における本願念仏においてのみであることを明かさんとする善導の言外の意趣を、みごとに洞破せられた積とみることができよう。

最後の廻向発願心については、

廻向発願心の義、別の積を俟つべからず。行者応にこれを知るべし。<sup>⑪</sup>

と釈している。「別の積を俟つべからず」とは、ただ単に善導の廻向発願心積の上に詳細に述べられているから、殊更に別の積を施すべき点がないということではない。更には、諸宗よりの専修念仏教団に対する弾圧乃至は、浄土教徒の謬解を招くことを恐れての故でもない。先に至誠心積をもつて通諸行の自力各別の三心をあらわし、深心積において弘願他力の三心を既に明かし、善導の意図せられたものは、実に深心の一つで端的に念仏行者の信が指教せられている。従つて、影略互顯して廻向発願心を准知せしめるという意趣において如上の如き積がなされたものと解すべ

きであろう。かくして、定散諸機自力各別の通の三心と如来利他他力の三心と異なることを示して、

今通を挙げて別に撰す。意即ち周し。<sup>⑧</sup>

と結ばれるのである。

以上、三心章に展開する私釈を手懸りとして、法然上人の三心についての理解を試みたが、元祖の信心論は『大經』の本願を本質として『觀經』の三心を積する善導の三心説を全面的に受容し、偏えにそれを依り拠として、本願念仏の心相を主体的な体験に即して明かし、善導の真意を人心をおどろかしめる如き端的な表現をもって顕彰せられている。然るに、上来の考察によって明らかな如く、『觀經』の三心は単に本願念仏のみの心ではなく、定散の諸行にも通ずる心であって、直ちに本願の三心には同致できない場合がある。とするならば、それを以て直ちに本願念仏の心相を頭わずには不都合な場合があるとみなければならぬ。従って、本願の信相は本願そのものの上において明確にせられなければならないのである。

かくして、善導、法然の三心積義は、その指教の意趣を真に汲みとった親鸞に受け継がれている。然るに宗祖においては、念仏必具の三心を『大經』本願の三心に配し、本

願の三心を直接に積し、三經の信心に真仮を分別して、三心即一論を展開していられる。更に本願の「乃至十念」の誓意をたずねて、本願の願体は全く三心にあることが示された。かくて三心往生、信心往生の誓願こそ第十八願の真隨であることを開顯し、信心が他力であり、従って三心の内在的意義は、「真如一実の功德法」としての名号を領受した信であるが故に、真如一実の信心、即ち如来廻向の信であることが明瞭にせられ得たのである。まことにそれは元祖法然上人が定散行と念仏行、即ち行々相對の上において、粗略な中にも鋭く教示せられた意底をたずね、微細にわたって明瞭に發揮せられたものといえよう。

註

- ① 『選択集』本 四二丁右
- ② 『散善義』(『選択集』本 三三三丁右)
- ③ 『聖全』卷四一五七八頁
- ④ 『往生大要抄』(『聖全』卷四一五七九頁)
- ⑤ 『選択集』本 四二丁右
- ⑥ 同 右 本 四二丁右
- ⑦ 同 右 本 四二丁右
- ⑧ 同 右 本 四二丁右
- ⑨ 同 右 本 四二丁右